



四 夏は夜（西の京巻 下）

このままでは地レンジャーが危ない。その時だ。強風が吹いてきた。地レンジャーの体にまとわりついていたネズミたちはその強風にあおられて、次々と吹き飛ばされていった。

それでも、ネズミたちのうちの一匹が、地レンジャーの体に執拗に噛みつくと、そのネズミの尻尾を別のネズミが咥え、別のネズミのしっぽを別々のネズミが咥えることで、まるで数珠か、剃髪前の尼僧の三つ編みのように、ネズミたちが繋がっていく。

別の表現をあえてさせてもらえば、体全身がボブマリーの髪のようにも言える。だが、お互いを結び付ける力も、台風並みの強風の勢いには抗しがたく、尻尾を咥えていた歯ごと抜け去り、一匹、また、一匹と次々と離れていった。

「大丈夫か」

風レンジャーが地レンジャーの前に駆け寄る。

「ありがとう。だが、かなり力を使い果たした」

地レンジャーは感謝の言葉を発しながらも、仲間の前だからこそ、本音を吐露した。

「じゃあ、これを食べろ」

風レンジャーの手からは甘い匂いが漂ってくる。その匂いは、辺り一帯にまで広がると、ネズミに襲われ、恐怖で委縮した人々の気持ちを和ませるとともに、歯を剥きだし、攻撃的なネズミたちさえも大人しくさせた。千二百年の京文化が舞い戻ったようだ。

「これは？」

地レンジャーの目にはきらりと星が飛び交っている。そして、差し出された赤や白など、色とりどりの星型のお菓子を掴んだ。

「金平糖だ」

風レンジャーが地レンジャーの心を読み取り、代わりに答えた。

「ありがたい。これを食べれば百人力だ。確か、以前、店の前を通ったら、営業時間前なのに、百人以上もお客さんが並んでいたぞ」

地レンジャーは金平糖を一つつまむと、ぽんと口の中に入れた。ほんのりとして、決して甘すぎることはない上品な味だ。だが、京の街を壊す奴らには甘い顔を見せられないと意を決する。そして、手のひらにある十数個の金平糖を一挙に口に含むと、力強く立ち上がった。

そんな様子を呆然と見ていたネズミ使いの塔がようやく我に返り

「お前は誰だ」と、地レンジャーを助け起こしている塔たちに向かって叫んだ。

「俺は、風の戦士、風レンジャー。京の地を守る戦士だ」

「何が、京の地だ。京は西だ」

その声とともに、強風で吹き飛ばされていたネズミたちが、より数を増して、二体の塔に向かって飛び掛かっていく。地レンジャーは地面を揺らしたり、風レンジャーは強風を吹かすものの、圧倒的な数のネズミの前で、次第に、体全体がネズミ色に埋もれていく。

「ネズミども。そこまでだ」

その声とともに、地面から水が噴き出した。噴水は、ネズミたちを弄ぶように地上高く吹き上げると、遥か彼方に吹き飛ばした。

「大丈夫か？」

「ありがとう水レンジャー」

三体のレンジャーが互いに手を握り合う。

「なんだ。まだ、仲間がいたのか。お前もネズミ潰けにしてやる」

その声とともに。更に数を増したネズミの大群が、三体の塔に襲い掛かった。三体のレンジャーは、地震、風、水でネズミたちを吹き飛ばすものの、吹き飛ばされたネズミたちはしつこく、再び舞い戻ってくる。その繰り返しが、ネバーエンディングストーリーのように、果てしなく続く。

だが、三体の塔レンジャーたちは、ネバーギブアップの精神で、決して、あきらめない。その傍らでは、ネズミ使いの塔が「京を西へ。京を西へ」と、お経を唱えている。

「痛い！」

三体の塔レンジャーたち体が嘔まれ始めた。その時だ。

「チュン」

ネズミが一鳴きすると体中から炎が燃え上がった。燃え尽きたネズミは地面に消えた。その様子を見たネズミたちが一斉に三体のレンジャーから逃げ始めた。その後姿を火の球が追い掛ける。

「ぼん」

火の玉がはじけると、数百、数千のネズミが黒焦げとなり、二次元の絵に戻った。

「おお、なんてことだ」

それまで、「京は西へ。京は西へ」と唱えていたネズミ使いの塔は、ネズミの死を悼むかのように、更に、「京は西へ。京は西へ」とお経を唱え始めた。

「助かった。ありがとう、火レンジャー」

三体のレンジャーが礼を言う。

「お互い様だ。それよりも、この京の都をネズミたちから守るのだ」

四体の塔レンジャーは空に飛び上がると、ネズミ使いの塔に向って、トゥーキックを放つ。お経を唱えることに一心不乱になっていたために、不意を突かれたネズミ使いの塔は

「うぎゃあ」と叫ぶと地面に倒れた。

「くそ。こうなれば、この術を使うしかない」

ネズミ使いの塔は、足の指で地面にネズミの絵を描く。それは、まるで、生きているかのように、それこそ、走り出しそうなネズミだった。そして、その前で、両手を組み、人差し指を合わせて、印を結ぶと、再び、「京は西へ。京は西へ」と唱え始めた。

すると、その地面に描いたネズミがむくむくと体を起こし始め、二次元から三次元になると、目の前の東山ほどの巨大なネズミとなった。

「大チュン」

巨大ネズミが咆哮した。その鳴き声は、右耳から侵入すると、脳にきりで穴を開けたかのように左耳に突き抜けるほどの、つんざくような波長であった。

「うっ。耳が痛い」「頭も痛い」

塔レンジャーたちは思わず耳を塞いだものの、指の隙間からも音が突入し。膝まづくしかなかった。

「どうだ。ネズミ寄せの術は」

ネズミ使いの塔は勝ち誇ったように飛び上がると、巨大ネズミの頭の上に鎮座した。

「こんなことで負けるものか」

塔レンジャーたちは、それぞれの能力を発揮して、風を起したり、地面を揺らしたり、水をかけたり、火を放ったり、また、四人同時に、トゥーキックを繰り出すものの、巨大ネズミの前では、相手にあくびを寄せさせるだけで、痛みを我慢するほど歯を合わさせることもなく、全く歯が立たない。

「どうした。塔レンジャー。お前たちの力はそれだけのものか。それなら、京は西に持っていくぞ」

ネズミ使いの塔が合図をすると、巨大ネズミが後ろを向いた。敵に背を向けるのか、と、一瞬、塔レンジャーたちの気持ちに緩みが生じた瞬間、強大なしっぽが鞭のようにしなりながら、塔レンジャーたちの横腹に直撃した。

「うわああ」

塔レンジャーたちは、それぞれ、松ヶ崎、西賀茂、大北山、嵯峨の山まで一瞬で吹き飛ばされた。草木をなぎ倒して、山の地面に大の字にのめり込んだ塔レンジャーたち。

「くそ。まけるものか」

塔レンジャーたちは、大の字の姿勢のまま、体を起き上がらせた。地面には、くっきりと大の字が描かれている。塔レンジャーたちは大股で京の街を走ると、再び、大ネズミの目の前に集結した。

「まだ、懲りないのか。そろそろあきらめたらどうだ」

ネズミ使いの塔は余裕の笑いを見せる。その余裕の笑顔を見て、塔レンジャーたちも、すぐには攻撃を仕掛けられない。

「どうする？このままでは、本当に、京を西に持っていかれてしまうぞ」

「しかし、相手は、東山のほどもある巨大なネズミだぞ」

「それなら、俺たちも巨大になろう。大には大で対抗だ」

「そうか、あの術を使うのか」

「いくぞ」

「おう」

四人の息が合った。地、水、火、風の順番で、組み立て体操のように合体した。その身長は二百メートル以上にもなった。まさに、空にまで届かんばかりの高さだ。

「ほう、お前たちは合体できるのか。だが、合体しても、所詮、つぎはぎの、ウドの大木だ。これを受けて見ろ」

再び、巨大ネズミが後ろを振り返り、尻尾を飛ばしてきた。

「トゥー」

その掛け声とともに、合体した塔レンジャーは、飛び上がると、空中に浮かんだ。合体することで、空を飛ぶ能力も身につけたのだった。

「なんだ、空も飛べるのか」

地上から驚きの声を上げて、塔レンジャーを見上げるネズミ使いの塔と巨大ネズミ。

「きりもみキック！」

合体塔レンジャーは声を発し、体を回転させながら、巨大ネズミを狙う。キックは巨大ネズミの腹に見事に命中した。

「小チュン」

先ほどの勝ち誇った鳴き声ではなく、痛みに耐えかねた泣き声だった。そう、道に倒れて、誰かの名を呼び続けるような、助けを求める哀しみの声だった。巨大ネズミはそのまま前のめりとなって、地面に突っ伏した。

「敵は、ダメージを受けたぞ」

「もう一発で、仕留められるはずだ」

「みんないいか」

「おう」

合体塔レンジャーは、再び、空に飛び上がると、巨大ネズミに向かって、回転しながら、降下して行った。

「巨大ネズミは居候の身だけど、三度の飯はお替りしても、同じ手は二度とは喰わないぞ。これでも受けて見ろ」

ネズミ使いの塔が叫ぶと、巨大ネズミは痛みを忘れたかのように素早く立ち上がり、後ろを振り向き、尻尾を大きく振った。

「こちらこそ、同じ尻尾攻撃は二度と喰わないぞ。うむ」

合体塔レンジャーは腹筋に縦筋が入るぐらいに力を込める。だが、尻尾の先端は、合体塔レンジャーに向かわずに、シュルシュルと龍が空に登っていくかのように上へと伸びていった。そして、上から目線で、巨大ネズミにキックを放つ合体塔レンジャーの体に巻き付いた。

「うっ」

「体が締め付けられる」

「くく」

「苦しい」

身もだえする塔レンジャー。

「どうだ、塔レンジャー。これが、これまで西の京と蔑められた俺たちの苦しみだ。この苦しみをお前たちも存分に味わうがいい」

ネズミ使いの塔が皮肉な笑いをする。

「どうする？」

「このままでは骨が折れてしまいそうだ」

「それこそ、骨折り損で、今までの戦いが無駄になってしまうぞ」

「それなら、こうだ」

合体していた塔レンジャーが分離した。そして、ネズミの尻尾から、下から目線ですりりと逃れた。今まで、合体塔レンジャーの体を締め付けていた尻尾は行き場をなくし、当てどなく彷徨った後、尻尾の先端は、自らの尻尾の胴体を塔レンジャーと勘違いして、巻き付いた。そのため、巨大ネズミの尻尾はこんがらがってしまった。

「なんて酷いことをする奴らだ。今すぐほどいてやるぞ」

ネズミ使いの塔は、巨大ネズミの頭から飛び降りると、複雑にからみあった尻尾をほどき始めた。だが、尻尾は知恵の輪のように絡み合っており、一見しただけでは、どこからほどいてよいかかわからず、ネズミ使いの塔は「うーん」と唸り、立ち尽くすだけであった。相手の隙を伺っていた塔レンジャーたちは、その様子を見て、

「よし、今だ」の掛け声とともに、再び、合体すると、空に飛び上がり、回転しながら、巨大ネズミの腹に、再び、突き当たった。

「グエツチュン」

巨大ネズミは体に優るとも劣らぬ大声を上げて、地面に突っ伏した。そして、二、三回、体を震わすと口から泡を吹き、眼を白黒させながら失神した。やがて、体全身が溶けるように、二次元の絵に戻った。

「おのれ、塔レンジャー」

ネズミ使いの塔も、巨大ネズミと共に地面に倒れ、体を強打したものの、巨大ネズミが元の絵に戻ったことで、怒りで体中の震えが止まらなかった。それでも、気を取り直して、再び、地面に足の指でネズミの絵を描くと、呪文を唱え出した。すると、再び、巨大なネズミが現れた。

「どうだ。絵描きの術は」

だが、その勝ち誇った言葉とは裏腹に、「はあはあ、ぜいぜい」と体が揺れるぐらい息が荒くなっている。この術は見た目は手を合わせるぐらいだが、内実は、百キロマラソンを走ったぐらいに気力・体力を使うために、一気に体が消耗してしまうのだ。ネズミ使いの塔の体の一部から瓦が数十枚落ちて、地面で割れた。それでも、闘い続けるネズミ使いの塔。

京の名称を京都から奪うための執念は末恐ろしいものだ。一時期的とは言え、京都を上回る文化を誇っていたという自負が、京都の文化を引き受け、発展させたという自負が、こうした行動の源になっているのであろうか。

再び、巨大ねずみと合体塔レンジャーの戦いが始まった。最終的には、合体塔レンジャーが巨大ネズミを倒すものの、再び、ネズミ使いの塔の絵描きの術によって、巨大ネズミが何回も再生された。

「はあ、はあ、はあ」

「ひい、ひい、ひい」

「ふう、ふう、ふう」

「へえ、へえ、へえ」

「ほう、ほう、ほう」

四人の塔レンジャーとネズミ使いの塔の荒い息は、しまいには、誰が誰の息かはわからないほど絡み合った。その息は、清水寺の鐘の音と共に、東山連峰にこだました。

合体塔レンジャーと巨大ネズミが闘っていたため、東山一帯は、一時期、立ち入り禁止となり、観光客等は誰一人として訪れなかった。

だが、そのうちに、その戦いに慣れたのか、自分たちには被害が及ばないことを知ったのか、返って、合体塔レンジャーと巨大ネズミが闘っていること自体に興味湧いて、まるで、お茶碗でご飯を食べたり、トーストと珈琲のモーニングサービスのような日常茶飯事のごとく思えだして、次第に、平気で、現場を訪れるようになった。

それどころか、清水の舞台から、塔レンジャーと巨大ネズミの戦いを生で見ることができると評判になり、まるで、プロレス観戦か、歌舞伎を鑑賞するような気分で、清水寺の舞台を訪れた。ありがたいことに、再び、一年坂、二年坂、三年坂は賑わいを取り戻すことができた。

連日、栈敷席は超満員で、立見席が出るとともに、観戦用のお弁当とお茶も売りに出された。中には、合体塔レンジャーと巨大ネズミに向って、おひねりを投げる人さえも現れた。また、どこで手に入れたのか、合体塔レンジャーと巨大ネズミの手形や足形までも売る者まで現れた。まさに、年中行事の顔見世興行だ。

こうした周囲の現象に、最初は、力の限り、真面目に戦っていた合体塔レンジャーとネズミ使いの塔、巨大ネズミは、次第に、自分たちが何のために闘っているのか、わからなくなってきた。

夏が終わりを迎えようとしていた。もうすぐ、紅葉の季節である。もっと観光客も増えるとともに、その観光客を迎える準備が必要となってくる。ネズミ使いの塔が提案した。

「俺たちも、これから観光客等が紅葉を見に来るので、その準備のために忙しくなる。だから、もう、このあたりで勘弁してやろうじゃないか。だが、いつか、必ず、京の名前を奪いに来るからな。それまでは、京は京都で許してやる。だが、あくまでも京は西だ」

と、捨てぜりふを残すと、巨大ネズミの頭に跨ると、一緒に鴨川に飛び込んだ。

見る見るうちに、あれほど大きかった巨大ネズミの体は小さくなっていき、落ち葉となった。ネズミ使いの塔が笛を吹いた。すると、どこからか、京都の街に隠れていたと思われるネズミたちが鴨川に集まってきた。その数、数千、いや、数万匹だ。

ネズミたちは秘かに、街の中に隠れて、いつでも、ネズミ使いの塔の命令で、ネズミ一揆を起こす準備をしていたのだった。街中から集まったネズミたちは、ネズミ使いの後を追って鴨川に飛び込んだ。

鴨川は、一瞬、ネズミ色一色となるとともに、すぐに落ち葉の枯葉色となった。巨大ネズミと同様、ネズミたちも落ち葉に描かれた絵だったのだ。ネズミ使いの塔は、数万の木の葉に揺られながら、鴨川を下って行った。

こうして、塔レンジャーとネズミ使いの塔、巨大ネズミやネズミたちとの闘いは終わりを告げた。

「さあ、これから」

「紅葉の季節だ」

「観光客たちが大勢くるぞ」

「準備が大変だ。じゃあ、また」

塔レンジャーたちも、互いに別れを告げ、それぞれの生活の場に帰るのであった。